

ラナーデとマハラノビスの間 (I)

—— インド経済思想家の経済的ナショナリズム論管見 ——

田 部 昇

I 考察の視角

インドにおける経済研究が、純粹理論の分野を別とすれば、経済政策論を中心とする個別研究であり、その研究方法はきわめて実証的伝統を持つというM・ミリカン教授の指摘は、過去、半世紀のインド人学者の研究状況を端的に表現したものである(註1)。

他のいずれの低開発諸国よりも長い経済研究の歴史と経済思想の独自性を主張し続けたインド経済学者は、独立後の経済計画を契機として、経済理論の分野で重要な貢献をなしたことは否定しえない。理論的フォーミュレーションにおいて独自の展開を示し、計画理論の分野の開拓に果たし、かつ果たしつつある役割は、すでに一般の認めるところである。

インド経済計画の基本的性格が、マハラノビス・モデルによって定式化されてから、すでに久しい。多くの経済学者が、モデル自体の体系と、その内在的論理の有意性に強い関心を示すとともに、他方、近代経済理論のインドへの適用可能性を研究するなど、新しい研究状況が生みだされつつあることは注目に値する。

しかしながら、新しい潮流を担う理論的指導者は、例外なく、かれらの思想形成期にケインズ革命の洗礼を強く受けた者であり、かつそれ以上、

強烈にインド固有の伝統的経済思想の土壌の中で自己の「経済学」的思惟を培養し続けた者であることに注意の目を向ける必要がある。

もしも、インド経済学者が経済発展理論に何らかの有意義な貢献をなしうるとすれば、それは、今日の開発理論が対象とする低開発国の長期動態過程を歴史過程の中で位置づけ、発展の戦略変数を抽出、比較秤量するという方法論的側面に、大いなる示唆を期待できると思われる。その可能性は、さきに述べたように、過去、半世紀のインド経済学者の貢献が、個別的・政策論的課題を経験的・帰納的手続きを通じて究明するという側面で、予見することができる。

本稿でとりあげるラナーデ(M. G. Ranadé)とマハラノビス(P. C. Mahalanobis)は、ともに、インドの経済思想に独自の影響を与えた人物であるとともに、その経済思想が、2人の活躍した時代の指導原理であり行動指針として経済過程に強い衝撃を与えたという意味で、インドの実践的経済思想家と考える。

ラナーデは、1890～93年間に発表した有名な論著『インド経済学論集』(*Essays on Indian Economics: A Collection of Essays and Speeches*, Bombay, Thacker & Company, Ltd., 1898, 328 p.)において、経済的ナショナリズム(economic nationalism)の経済学的意義を体系化して、経済発展の動態的諸

契機とそれらの相互連関性を究明し、インド近代化の総体的過程に長期的展望を与えるという理論的貢献を行なった。ラナーデの経済思想は、実践的課題としては、その後の国民会議派の経済的指導原理となり、さらには、1931年、産業政策の転換を誘導する契機を提供することとなった⁽¹¹²⁾。

ラナーデの経済思想の独自性は、第1に、19世紀末葉に支配的だった古典派的思想状況下において、当時の世界主義の認識論に相対主義の認識論をもって挑戦することにより、経済発展の段階的飛躍に迫るという思惟方法が指摘される。

つぎに、経済発展の現象を、経済の主體的・制度的要因の相互規定的現象として文化変容の総体概念の枠組の中に設定し、その変革の担い手、ないし起動因を、経済組織を組織化する国家の誘導、指導、規制機能に求めるという構図である。

これら方法的思惟の背景には、インドは他の先進資本主義国とは異質であり (India is "different"), その有力なインプリケーションは、植民地的従属性を強く意識していることは明白である。

マハラノビスは、第2次5カ年計画の理論模型を示した著書『インド計画化の戦略的接近』(P. C. Mahalanobis, *The Approach of Operational Research to Planning in India*, *Sankhya*, *The Indian Journal of Statistics*, Volume 16, Parts 1 & 2, December 1955, 130 p.) によって独立インドの経済建設の目標と手段を明示した。マハラノビス・モデルは、マハラノビスを中心にインド統計研究所が多くの社会主義圏の学者を動員して作成した計画モデルとして知られている。これに参加した社会主義圏の学者の影響は、計画作成の段階で準備された無数の覚え書から明瞭に感知できるが、模型そのものを貫く思想は、すでにマハラノビスの頭脳の中に予定されていたことに注目しなければならない。マハ

ラノビスにあっては、社会主義圏の計画技術を導入すること、諸外国の経済発展の経験を習得すること、そのために、広く諸外国の学者を動員して計画に参画させること、などは、自己の経済思想を具体化するに必要な要件であった。

マハラノビスは、すでに、1940年頃、詩聖R・タゴールを通じて故ネルー首相と知己の間柄にあり、インドの経済計画の基本構想を、政治的には、当時の国民会議派計画委員会の、思想的には、ラナーデを起点とする民族運動家、とくにG・ゴークレ(Gopalkrishna Gokhale)の政治理念の強い影響をうけて、徐々に形成していった。

マハラノビスにおけるインド経済の長期動態過程の認識は、必ずしも明示的ではないが、ラナーデの論著に示された経済思想と類似性を持つと考えられる。

そこで、以下、ラナーデとマハラノビスの経済思想をとりあげる共通の視角を述べる。

1. 経済思想の内在的形成論理の類似性

インドの経済問題の認識と実践的経済政策は、インド固有の特殊性と社会・経済生活の形態に則して究明すべき、との認識が前提となる。その意味するところは、アダム・スミスやリストの国民経済学者の認識がそうであったように、産業資本主義の形成期にあっては、経済発展の現象は、国内的要因としての経済的・社会的後進性と国際的要因としての、先行資本主義諸国による政治的・経済的強制と従属が、最も顕著にからみ合って発現する。インドにあっては、累積的な「インド的」貧困が、まさに、インド固有の経済問題そのものであるとの認識にたつて、経済政策は国家による経済活動の積極的、かつ多角的指導によって可速度的工業化を首軸とする段階飛躍が志向される。この点に関しては、ラナーデとマハラノビスは類

似の思想体系を所有する。

2. 実践的政策論の相違

ラナーデにあっては、ドイツ歴史派リストの段階的發展を継承し、均齊的成長の思考が基本的思潮であるのに対して、マハラノビスは、ドメステック・バランスを重視するビッグ・プッシュの政策手続きの立場を持つ。

この実践的政策手段の選択の相違は2人の思想家の置かれた時代の客観状況のそれに起因する。すなわち、2人の思想家が共有する経済発展の「長期動態論」には、相違は認められないけれども、約半世紀間に顕在化した国際的窮乏化の現象が、マハラノビスをして“援助による飛躍”(assisted take-off)の志向を政策手段の選択の際に誘導する結果となった。

3. 方法的思惟の共通性

ラナーデとマハラノビスの共通の特徴は、政策の立場を洗いおとしてみれば、理論の根底には、一国社会を形成する歴史的諸要因とその国民性の相互規定的交渉の中に類別される地域経済圏の発展段階の差異を経済組織の組織力に注目して、経済発展の地域的問題を歴史性の中に結びつけようとする方法的思惟の立場を見いだす。ラナーデは、組織力の欠如を経済主体としての企業者職能の問題として把握し、国民経済計画による国家の家父長主義的機能を重視するに至る。マハラノビスは、組織力の差異が植民地的従属性の歴史過程にあって、先進資本主義諸国との技術水準の差異によって生じた、という認識から出発し、経済計画による国家の指導的役割を重視する。

ラナーデの企業者職能にせよ、マハラノビスの技術水準の格差にせよ、国民経済の形成契機を地域経済圏における歴史的限定の問題として設定する立場は、ドイツ歴史派リストの国民生産力概念

の思惟方法と類似性を持つと思われる。

(注1) Max Millikan, "Economic Thought and Its Application and Methodology in India", *American Economic Review*, Vol. XLVI, May 1956, No. 2, pp. 339~407.

D. H. Butani, "The Quality and Perspective of Indian Economic Thought", *Indian Journal of Economics*, Vol. XXII, January 1942, No. 86, pp. 280~289.

(注2) Khagendra N. Sen, "Economic Thinking in the Indian National Congress", *Indian Journal of Economics*, Vol. XXII, January 1942, No. 86, pp. 689~706.

Indian Industrial Commission: Report, 1916~1918, Calcutta, Superintendent Government Printing, India, 1918, 355 p.

ラナーデ思想とインド・ナショナリズムとの関係については、つぎの著書が参考となる。

M. A. Buch, *The Development of Contemporary Indian Political Thought*, Baroda, Good Companions, 1938, pp. 150~329.

A. R. Desai, *Social Background of Indian Socialism*, Bombay, Popular Book Depot, 1959, pp. 282~349.

II ラナーデの経済思想

ラナーデの経済思想が、しばしば、後世のインド経済学者によって、それぞれ異なる評価と解釈を加えられていることは、あたかも、ドイツ歴史派リストの場合がそうであったように、われわれに興味深い研究課題を提供する。

およそ経済思想史上、リストほど多くの異なった評価の与えられた経済学者は少ない。ヌルクセ(R. Nurkse)^(注3)はかれを「経済的国家主義者」、ジード、リスト(Gide and Rist)^(注4)は「ドイツ帝国主義の先達」、F・クレアモンテ(F. Clairmonte)^(注5)は「均齊的成長概念の創始者」、とそれぞれ特徴づける。また板垣教授は^(注6)、リストの段階論的基本認識は、歴史的・実践的形成論理としての段階理論の本質をもつものとし、その現代的意義を再評価する。それほど、リストの経済思想が後世の学者によって異なった評価や解釈を与えられたように、ラナーデは、また、「インドの最もすぐ

れた経済学者」であり、「インドではじめて経済計画の必要を説いた経済学者」(註7)とも呼ばれ、あるいは、「初期資本主義の形成期における国民経済学者」(註8)「社会的厚生研究の先達」(註9)と特徴づけられている。われわれは以上に加えて、経済活動における国家の役割についての考え方が、現代インドの「混合経済」論の思想的原型となったことに、ラナーデ経済思想の現代的意義とその貢献を高く評価したいと考える。

以上のことは、ラナーデの経済思想の体系的特徴を、それぞれの視点から評価したものであり、かれの思想の豊かさを物語るものである。

ラナーデの経済思想の体系ならびにその思惟方法を、われわれは、まず、ラナーデの『インド経済学論集』に求めねばならない。第1章、「インド政治経済学」(Indian political economy) (pp. 1~39)には、この著作の全体を貫くラナーデの立場が叙述されている。

1. ラナーデの「インド政治経済学」の特徴

ラナーデが、著書『インド経済学論集』(以下『論集』と略す)の第1章「インド政治経済学」において展開した思想体系は、およそ三つの特徴をもつ。第1の特徴は、経済学的認識方法に関するラナーデの見解についてである。

『論集』が発表された1890~93年間、当時のインド経済思想界は、古典派の世界主義に対するドイツ歴史派リスト(1841年)の強い影響を受け、「保護貿易論」を中心とするリストの実践的政策論は、ラナーデの思考に多大の示唆を与えずにはおかなかった。

リストの思想的影響は、その学説の経済学的認識方法について最も顕著であった。

当時のイギリスは、産業革命以来、すでに1世紀有余の資本主義の歴史を背景とし、インド政府

の経済政策は、終始、宗主国イギリス商業資本のインドにおける権益と利得を守ることに主眼がおかれていた。その根底に支配する古典派理論は、外国貿易における地域的国際分業論をもって、熱帯アジア後進諸国を原料供給国、温帯ヨーロッパ先進諸国を工業立国と類別することに成功した。

ラナーデは、聖書マタイ伝を引用して、この古典派世界主義の認識に痛烈な批判を加えた。

すなわち、「すべて有てる人は、与えられて愈々豊かならん。されど、有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし」と。

1892年に世上に発せられたラナーデの警句は、当時の先進国イギリスの経済理論と世界主義的認識が、いかに、熱帯アジア後進諸国に普遍妥当性を欠くものであるかをきびしく批判したものである。われわれは、あらためて、その洞察力と批判精神の現代的意義を高く評価する。

それは、ちょうど、G・ミルダール(G. Myrdal)が、『経済理論と低開発地域』の中で、既成の経済理論の先進国偏愛を批判し、後進国問題への方法的反省をうながすとともに、ラナーデ同様に、マタイ伝を引用して国際的窮乏化法則の現象を指摘した功績を思い起こさずにはおかない。

ラナーデはこうして、経済学的認識の普遍性といわれるものは、実は、その観察の対象となる社会の地域的限定と歴史的・時間的限定の中でこそ意味をもつものとして、経済学的認識における「相対性の原理」の重要性を強調することになった。これはとくに、実践的政策論の展開に重要な意味をもつ結果となることは、あらためて言うまでもない。

第2の特徴は、経済発展の長期動態過程に関する思考についてである。

ラナーデにおける「インド政治経済学」は、本

質的には経済学的理論体系を示すものではなく、経済学的認識の主体的形成論理を強調する思考技術であると考えられる。

『論集』の中で、ラナーデが、当時の既成経済学を批判しつつ、リスト流の認識方法に依拠しながら、「インド政治経済学」の体系を構築しようと試みたけれども、ラナーデは、リストやクニースなど歴史派と同じように、経済理論およびその認識と政策論とを混同するという結果に終わった。

ラナーデによれば、経済理論とは実践行為の展開にすぎない (Theory is only enlarged practice)。古典派理論は、インドに適用することが困難であることを指摘し、新しい経済学体系を志向せんとしたラナーデは、『論集』の基盤として揚言したインド固有の「経済法則性」とは、実は法則なり理論ではなく、インドの特殊性や個性を浮きぼりにするという効果を露呈するに至った。この学風は後世のインド人経済学者のゆるぎない伝統として継承され、実証的研究の歴史を形成するにいたった^(注10)。

しかしながら、ラナーデの展開した経済発展論とその分析方法には、今日の低開発国開発理論にとって重要な示唆を与える幾多の貢献が見いだされる。すでに述べたように、ラナーデ経済思想の評価と解釈が多岐にわたる理由は、まさに、かれの経済発展論のもつ独創的な思考とインド社会の包括的観察に基づく体系的総合性にあるといえよう。

いま、その特徴を列記すると、

(1) 経済発展は、社会変動の総体概念の下位体系として定立すること。

(2) 経済発展あるいは長期動態過程は、国民国家の統一と国民経済の形成の一体的関連の中で実現さるべきこと。

(3) そのための発展的契機は国家であること。

経済と社会と個人の全体的発展は、国家の誘導・指導・規制機能を通じて可能となる。

(4) 上述の全体的発展は、経済組織が伝統的・硬直的状态から、近代的・弾力的状態への移行によって促進される。

(5) 経済組織の変換は、企業者職能の供給が必要十分でなければならない。国家の経済活動における役割は、この分野で必要となる。

以上、ラナーデの経済発展論の全体構図を管見したが、ここに示されるところからラナーデの貢献を列記すると、以下の諸点が指摘されよう。

(1) 当時、D・ナオロジ (D. Naoroji)^(注12)に代表されるインド経済思想家は、イギリス帝国主義の植民地支配とその政策がインド経済の停滞性と後進性を規定したという論旨を背景とするのに対し、ラナーデは国民経済形成の構造的諸契機を機能的に分析し、経済発展論としての思考の定立化を行なった。その重要な貢献は、まさに現代的意義に照らして再評価をするならば、経済的ナショナリズムの経済学的意義を体系化することにあつたといえよう。ここに、「経済国家主義者」と評価されるゆえんがある。

(2) 長期動態過程に関する重要な発展要因として企業者職能の役割を指摘したことは注目に値する。その指摘は、ホーレイ (Hawley)、クラーク (Clark) あるいは、シュムペーター (Schumpeter) 理論において企業者職能が問題とされる以前に、ラナーデの体系に重要な位置を占めていた。

また、経済発展は、農業と工業、農村と都市の均斉的成長に基礎を置くべきこと、経済発展とその構造調整のためには、国家による経済計画が必要であること、など、およそ今日の低開発国発展問題が当面する重要な理論的側面を提起した。こうして、ラナーデが「均斉的成長論の経済学者」

と、あるいは「経済計画の必要を説いた経済学者」などと呼ばれるゆえんである。

(3) 経済発展を社会変動という総体概念の枠組の中で取り扱う立場から、経済集計量の問題を社会的厚生の問題へと進展させる方法を指摘した。これは、ラナーデの経済思想に中心的位置を占めるに至らなかったが、のちの経済学者、あるいは思想家が、主要関心事として展開する契機となったことは否定できない。

さて、最後に、第3の特徴として、ラナーデの「インド政治経済学」の根底にある、インド経済・社会の事実認識に関する部分が、かれの経済学的思惟方法や経済発展論の内在的論理を形成する基盤となる。

ラナーデが強調する経済学的認識における「相対性の原理」の重要性は、インドにおける共同体社会とその構成員に関する歴史的・心理的要因の包括的な観察から組み立てられたものであることに注意を要する。この点は、あとで詳細に紹介する。

2. ラナーデ・モデルの基本構図

ラナーデに示される経済学的認識方法および経済発展論の特徴は、すでに述べたように他の西欧諸国と区別するインドの特殊性や地域性を明瞭に抽出することによって先進諸国との発展段階の質的差異に着目し、その克服の契機を経済組織の主體的側面に見いだそうとする思考がそれである。

それでは、他の先進諸国と区別する本質的差異とは何か。これこそ、ラナーデの思想と思惟体系を構成する重要な要素である。

その意味で、ここでは、この特殊性あるいは地域性の体系を指してラナーデ・モデルと呼ぶことにしよう^(註12)。

「インド政治経済学」の22ページから、原文のま

ま引用をしよう。

“The Characteristics of our Social Life are the Prevalence of Status over Contract, of Combination over Competition. Our habits of mind are conservative to a fault. The aptitudes of Climate and soil facilitate the production of raw material. Labour is cheap and plentiful, but unsteady, unthrifty, and unskilled. Capital is scarce, immobile, and unenterprising. Cooperation on a large scale of either Capital or Labour is unknown. Agriculture is the Chief support of nearly the whole population, and this Agriculture is carried on under conditions of uncertain rainfall. Commerce and Manufacture on a large scale are but recent importations, and all industry is carried on, on the system of petty farming, retail dealing, and job working by poor people on borrowed capital. There is an almost complete absence of a landed gentry or wealthy middle class. The land is a Monopoly of the State. The desire for accumulation is very weak, peace and security having been almost unknown over large areas for any length of time till within the last Century. Our Laws and Institutions favour a low standard of life, and encourage subdivision and not concentration of Wealth. The religious ideals of life condemn the ardent pursuit of wealth as a mistake to be avoided as far as possible”.

ここに長文の引用を行なった理由は、ラナーデの論述の原意を忠実に紹介するとともに、文脈上の解釈が筆者の主観的判断に落ちこむことを避けようとする配慮からである。

まず、この文章は、イギリス古典派理論批判の意図のもとに書かれたことに注意する必要がある。それは、西欧理論の先進国偏愛に対する非難であるとともに、低開発国への適用可能性に対する疑念でもある。

論点の第1は、生産要素の不完全移動性、ないしは、不完全競争性に関する論証がある。

インドにおける社会生活の特徴が先進西欧諸国と異なり、個人主義的合理性に欠け、契約よりも身分が、競争よりも調和が支配的であることを指摘する。

生産要素である労働・土地・資本の3要素は、

社会的慣習、カースト制度等によって移動性が抑圧されている。

ラナーデは、さらに、別の表現を用いてつぎのように要約している(pp.9~100.カッコ内は筆者の意訳)。「(経済活動においては)、個人よりも家族やカーストが一段と強い影響力をもつ。富を追求しようとする利己心が欠如してはいないではないが、それが唯一の主要な動機ではない。…自由な無制約的競争は、一部の(生まれながらの)特権的グループを除いては存在しない。慣習と国家の規制が競争より一段と強い影響力をもち、契約よりも身分がより決定的影響力をもつ。資本や労働は移動性がなければかりか、進取の気象に欠ける」と。

論点の第2は、生産要素供給の非分割性についてである。ラナーデは別の個所で(p. 10)、「賃金と利潤は固定化し、環境の変化に対して硬直的であり、非弾力性である」と述べ、労働の供給の硬直性を指摘している。

以上、二つの論点は、当時のインドの現実を反映していることは、他の傍証をあらためて求めるまでもない。ラナーデが明晰な分析を試みた二つの論点、すなわち生産要素の不完全移動性と非分割性は経済理論の純然たる「仮説的真理」であり、「公理」と考えられている性質のものである。ラナーデはこの「仮説的真理」に対して、インドの現状がいかにか西欧諸国と異質なものであるかを論証した。

興味深い指摘であり、いっそうの入念な吟味が必要であるが、ここではこれ以上その是非を問わない。つぎに進もう。

ラナーデの上述の文章の指摘する当然の帰結として、インド社会の封建遺制、その内在的あるいは構造的欠陥が露呈されるに至る。ラナーデによれば、停滞性と依存性、沈滞と貧困が、インド社

会と民衆に深い刻印を残すことになった。

これに拍車をかけたのが、植民地従属の結果もたらされた富と人材の国外流出であった。

これは、有名な「富の流出理論」(drain theory)に対するラナーデの見解を示すに十分な説明であろう。ラナーデは別の個所で、貧困の原因をイギリス帝国主義の植民地支配に求めようとする説に対し、「もし、イギリスの支配がなかったならば…」という仮定の論議がいかにか非生産的であることを説き、イギリス植民地制度の功罪に直接論議の焦点を合わすことを避けた。

N・V・ソパニ(N. V. Sovani)^(註13)は、ラナーデ経済思想に難点があるとしたら、それは、イギリス帝国主義の意味と本質の理解に欠けるころにあった、と指摘していることは、興味深い批判と思える。この問題はここでのわれわれの直接の問題関心ではないので、これ以上の言及を避ける。

つぎに、西欧理論の経済学的認識を中心とする批判を背景としつつ展開した、ラナーデ・モデルの動態的側面に移ろう。

まずラナーデの議論は、外国貿易に関して、地域的分業体系に関する部分と、国内市場に関する部分、の二つから構成されている。

議論の第1。すでに述べたように、古典派理論にみられる、生産の地域的分業論は、熱帯アジアを原料供給国、温帯ヨーロッパを工業国として類別し、固定化することになる。

ラナーデはこの現象を非難して、(1)熱帯アジアの過去の輝かしい歴史には高度の技術と芸術性の高い工芸品の生産が可能であったこと、(2)工業は製品の潜在的需要を必ずもつ原料資源の周辺に発達すべきこと、(3)熱帯アジアが原料供給国として永久に類別されるならば(if permanently stereotyped)

収穫逡減の法則に支配される産業に特化せざるをえなくなる。(4)その結果、所得の地域的格差は拡大し、熱帯アジアにおける累積的窮乏化は不可避となる。(5)さらに注意しなければならないことは、熱帯農業は不確定な降雨や飢饉によって生産が停滞する宿命にあるという事実、など、以上の基礎の上に、ラナーデは長期発展の問題に接近を試みようとする。

議論の第2。国内市場の拡大(ラナーデは、domestic exchangeなる用語を用いる)あるいは購買力の増加は、持続的発展の前提条件であるとともにその必然的結果でもある。

ところで、農業の発展は非農業部門の市場を前提とし、都市化の現象は、当時においては土侯を中心に宮廷需要を充足するための都市産業の没興によって支えられていた。

国内市場は、もっぱら土侯を中心とする地方権力者の市場にすぎなかった。ラナーデの指摘は、今日、元藩王国地域に散在する多くの官営企業、それを中心に発達した地方都市などを思い起こすならば、当時の国内市場の地域的偏在の理由が理解できる。

いわば、非自生的都市化の現象は、ラナーデの時代においては外国製品の無関税輸入によって、都市の伝統的産業は没落の運命をたどり、ひとたび確立した都市化は、後退せざるをえなかった。19世紀の経済史のよく物語るところである。

ラナーデは、これを「近代インドの農村化の進行」(the progress of ruralization in modern India)(p. 27)と定義し、つぎのような興味深い、しかし非惨な事実を指摘している(カッコ内と傍点は筆者による)。

「近代インドにおける農村化の進行とは、インドの衰退を意味する。国力は失われ、知性と自力

更生の精神は影をひそめた。(都市化とともに)臨海港湾設備は発達し、若干の鉄道が敷設されたが、この農村化をくい止めることはできなかった。工芸、紡織、染色、油しぼり、製紙、牛乳、砂糖、金属製品職人など、あらゆる階層の人々は、西欧製品の競争に対抗しきれず、町を離れ、農村にもどっていった。かれらは無気力な群衆の一員となり、貧乏と飢饉に耐えることも不可能となった。」

ラナーデの激しい、しかし冷徹な分析に示されたインドの荒廃ぶりは、当時の多くの資料や文献がみずからあきらかにするところである。ときにインドは、1882~94年間自由貿易国であった。一方、ドイツ、フランス、アメリカは、保護貿易によって繁栄を内外に誇示した時代でもあった。

以上にみられる「農村化」の議論は、ラナーデにあっては、幼稚産業保護の必要性を経験的に認めるとともに、国内市場あるいは購買力の増加による経済発展は、農業と工業、農村と都市との均斉的・相互連関的発展として把握する、理論的構図を生み出す結果となった。さきに述べた、地域的分業体系と国内市場に関する議論は、それぞれの生み出す派生的な政策論を別とすれば、一貫して経済発展の長期的ビジョンの中で組み立てられていることに注意する必要がある。

それは、A・スミスがイギリスの、F・リストがドイツの、それぞれの国民的利益の規準において経済発展の長期的ビジョンを理論化したと同様に、ラナーデもまた、インドの発展を国内的要因としての国内市場の拡大(そのために必要とされる経済的・社会的停滞性と後進性の打破)と、国際的要因として、先進資本主義諸国との不平等要因の除去(経済的従属と抑圧からの解放)の二つに焦点を合わせた。

ここに、経済国家主義者として共通の問題設定

が認められるとともに、前述したラナーデ・モデルの独自性が実践的政策論としてはラナーデを重商主義者とさせる結果となったことは、まことに興味深いといわなければならない。

それは、イギリス産業革命を首軸として同じ経済国家主義者の性格をもつA・スミスを自由貿易主義者とし、F・リストを保護貿易主義者とした、それぞれの時代的背景と産業資本主義の発展段階の質的差異の問題に帰着することにもなる。

われわれが、はじめに、ラナーデをとりあげる視角の一つとして経済思想の内在的・形成論理を問題設定した理論的興味は、まさに異なった諸国間の、異なった発展段階の質的差異の究明を通じて、おそらく派生的に露呈するであろう実践的政策の有意性を理解しようという狙いにもつながるものである。

3. ラナーデの経済発展論管見

前節では、ラナーデ・モデルの動態的側面として、工業発展の必要と国内市場の拡大が果たす役割について考察した。

また、ラナーデの描く経済発展についての長期的ビジョンは、他の経済国家主義者がそうであったように、農業と工業の均斉的発展に基礎をおくことに特徴があることを指摘した。

以下においては、ラナーデの経済発展論に重要な位置を占める三つの問題、すなわち、経済活動における国家、工業化、および農工バランスについて、ラナーデの考え方をとりあげる。

まず、ラナーデが、インド経済の長期的発展の課題を上述の三つの視点から究明するとき、われわれは、ラナーデが指摘するインド経済窮乏化の現象に耳を傾ける必要がある。

ラナーデの『論集』(p. 66)に興味深い文章があるので引用しよう。

「産業間の調整 (co-ordination of industries) は農村と都市の人口比を確定するが、最近では、かつてないほどの規模で崩壊してしまい、大量の人口は過密度の耕作によって疲弊した土地に依存することになった。人口の増加は、それが同程度に物質的快楽をもたらすことにはならない。むしろ、土地の限界効用が失われるに至るまで未耕地の活用がすすめられ、ひとたび雨期の到来とともに数百万人が死亡し、あるいは餓死するという結果をもたらす。

貿易と商業活動が活発化することは、徐々にではあるが、土着企業および、それに従事する人々の数を減少させる結果となる。また、政治権力の独占は、商業資本と製造工業活動の独占・集中化と結びつくに至る。」

ここに指摘されたように、インド経済の窮乏は、農業という単一の資源に依存せざるをえない経済構造が、いっそう土地・人口比率を高めるという結果となった。この歴史的現実が、ラナーデをして工業化を最重要政策としてとりあげることになった。しかしながら、工業化が成功するためには、農業と工業、農村と都市の均斉的発展が前提とならねばならないことは、ラナーデの十分認めるところである。この点は後述する。つぎに、土着企業ないし企業家努力は、外来の商工業活動や貿易が活発化するにつれ、しだいに後退あるいは衰微するに至った事実を指摘し、インド経済の停滞性に迫る。

ラナーデは、この事実を『論集』の別の個所でとりあげている。

インド政庁の鉄道建設政策、および鉄道投資の意義について、ラナーデは、つぎのように考えている。すなわち、

「政庁の実施した鉄道政策は、事実問題として、

わずかのイギリス領インドの都市を除けば、地方の土着産業に壊滅的打撃を与え、民衆を、かれらの唯一の資源である農業にますます依存させる結果をもたらし、かつてないほど、救いようのない状況にまで追い込んでしまった」(p.90)と。

以上の見解によれば、当時、家内工業を中心とする村落の生産活動が、鉄道建設によって整備され、促進された一群の産業、綿紡績、ジュート、および石炭の各産業によってむしろ抑圧され、伝統的な村落の産業は崩壊するに至った。この見解は、鉄道建設ないし投資の経済的意義を必ずしも適切に示すものではないと思われる。経済発展に果たす鉄道投資の役割は、イギリスやアメリカの古典的事例が示すように、ハーシュマンの表現によれば「後方連関効果」(backward linkage effect)を強くもつと考えられる。

インドにおける鉄道投資が、工業発展の、いわばリーディング・セクターとしての機能を、石炭と繊維とジュート、それに加えて若干の金属工業について果たした役割は、決して無視しえない。この点は、ハーシュマン理論のインドへの実証として、独立した論文として後にとりあげることにする。さてラナーデは、その経済的意義は別としても、巨額の鉄道投資が土着企業を衰微させ、企業家努力を抑止した事実を指摘して、鉄道投資と同程度の重要性をもつものとして新規産業への投資、しかも政府の援助と保護によってなすべきことを提唱する。

ラナーデによれば、政府の援助と保護によって企業が創設されるためには、企業家が必要であり、投資資金が所望される。工業発展にとって、この二つの要素が重要であることは今日すでに明白であるが、ラナーデは当時19世紀末葉、インドにおいて広範囲に進行していた鉄鋼業の実態を究明し、工

業発展の阻害条件をつぎのように列挙している。『論集』中、第6章「鉄鋼業——先導的試み」(p.176)。

- (1) 使用する資本額、および民間企業の資本調達額が不足していること
- (2) 原材料の不足、およびコスト高であること
- (3) 立地条件が悪いこと
- (4) 政府の保護と育成の政策が欠けていること
- (5) 企業経営者、ならびに熟練技術者が不足していること

以上、五つの点を指摘し、とくに当時の工業発展に先導的役割を担うべく期待された多くの鉄鋼産業(ラナーデは17の企業を対象として分析)が、実は、その狙いにもかかわらずほとんど失敗に終わった事由は、資本の不足と企業者の経営技術の稚拙さであったという点に注意する必要がある。

資本の調達機構が不備であり、農村における貯蓄動員のメカニズムはほとんど考えられていなかった。また、一般教育のほかに科学・技術教育はまだ発達せず、急速な工業化を担う専門技術者の層は不十分であった。

19世紀末葉のインド鉄鋼業の歴史を回顧し、工業発展のための基礎として、まず、(1)土地所有制度の改革と農村金融の改善等によって、工業製品の国内市場を形成すべきこと、(2)教育制度の改革、すなわち、技術教育の発達、普及を可及的すみやかに実施し、技術者の供給を確保すべきこと、以上の2点が強調される。こうして、ラナーデは経済活動における国家の役割の問題に移る。

すでに、ラナーデの経済思想における国家の役割について触れたが、ここでもう一度、とりあげてみたい。

ラナーデの「インド政治経済学」の主要な目的は、インドの経済発展のために、国家の果たすべき役割、その範囲を、インド固有の必要と現状に

則して定立することにあつたと考える。その意味で、国家の役割に関する議論は、ラナーデの中心的位置を占めるといっても過言ではなからう。

国家の役割を、経済活動の分野について限定すると、ラナーデはリストと同様に、経済の発展段階の差異によって、国内的には幼稚産業の保護と対外的には保護関税の政策をとらざるをえない、との立場をとる。しかしながら、国家の介入は段階的移行の際にのみ必要とされ、その後は自由競争にゆだねることが、望まれるという考え方である。したがって、政府の援助や保護は、民間企業の育成を主眼とし、あくまで、工業化の補助的機能にとどまるべきであるという。

ところで、「インド政治経済学」の中で展開したラナーデの見解は、まず経済活動に果たした国家の役割のインドと西欧諸国との比較から始まる。さきに述べたように、国家の役割の範囲をインド固有の状況と必要から規定することが、ラナーデの狙いでもあつた (p. 32)。

「……国家 (State) は、唯一の landlord であり、最大の資本家であることはまちがいない。

インドでは、鉄鋼や石炭産業の育成、綿花、タバコ、茶、コーヒー、キニーネのプランテーションにおける植物実験など、国は多くの貢献を行なつた。しかしながら、インドの資源は多く、かつ埋蔵量は豊富であり、また、その開発の必要があるにもかかわらず、インド政府のなしたことは、フランス、ドイツ、およびその他諸国の政府のなしたことと比較すると、むしろ少ないというに等しい」と。

経済活動における国家の役割の範囲を規定するため、ラナーデはまず、インドの豊富な資源が未開発であり、インドの将来は、この未利用資源の有効な活用をもってはじめて可能となるという認

識が前提となる。まさにインド固有の状況と必要とは、この認識を指す。国家のなすべき役割は、こうして経済活動における範囲として規定されてくる。

この考え方は、後述するマハラノビスにおいても、国家による経済計画の戦略を規定する際に、類似の考え方、表現をもって対応することは、まことに興味深い。いま、参考までに関連ある文章を引用しよう (註14)。

「インドは豊富な鉄鋼石、石炭、その他の天然資源に恵まれている。したがって、長期の目標は、国内で資本財を製造できるようにすることであり、輸入に依存することではない。適切な“開発”戦略は、基幹重工業部門での投資額を増加し、まず、投資財製造工業を急速に発展させなければならない。重・軽機械、その他資本財の生産能力が増大するにつれ (国産資本財を使用して) 投資能力もしだいに増大し、インドはいつそう外国製機械や資本財の輸入に依存しなくなるであろう」と。

この一文は、第2次5カ年計画案の基礎となつたマハラノビス・モデルの基本的考え方をあますところなく伝えている。

マハラノビスは、プランニングによる工業化の戦略に重点をおき、直接、国家の役割とその活動分野を規定することはしなかつた。

ラナーデにおいては、国家は、まず、みずからが企業者として新しく企業を創設すべき義務があるとす。たんに、既存の企業、産業の保護・育成にとどまらず、国家みずからが企業者職能をもつという思想は、ラナーデに始まると考えてよい。

つぎに、国家の役割は、経済発展のために土着の資源・資本を動員し、これを有効に利用するため国営工場 (state factory) を組織すべきである、という。

以上が、「インド政治経済学」の中に流れるラナーデの考え方である。ついでながら、ラナーデの経済政策の基本的性格について触れたい。すでにたびたび指摘するように、ラナーデの立場と認識は、リストと同様、経済国家主義者としての性格によって特徴づけられている。実践的政策として打ち出した諸施策は、すべて国家による家父長主義的特徴をもつ。経済の長期動態過程を、小農から大農へ、農業中心から工業中心の構造変化、「農村化」(ruralization)から都市化へ、国内市場から国外市場への拡大、などの視点からとりあげて国家の経済政策を処方するラナーデの立場は、資本主義形成期に共通の課題として提起したスミスやリストと異なるところはない。B・ダット (Bhabatosh Datta) はこれを state paternalism と称し、国家社会主義、あるいは国家資本主義と本質的に異なる要素であると指摘している^(注15)。

いずれにせよ、ラナーデがその思想の体系と認識方法において経済国家主義者であるという理解の当然の帰結として、ここでは、経済発展の主要な契機を経済的ナショナリズムに設定し、インド資本主義の形成期に段階飛躍の必要を体系化し、理論化した貢献は、今日の理論関心に照らして、十分その現代的意義を評価することができると思われる。

ラナーデの経済思想が、19世紀末葉のインド思想界にゆるぎない一つのマイルストーンを打ち込んだと言っても過言ではない。

思想の獨創性よりも、体系的総合性にすぐれ、経済学的認識においては、インド社会の深い分析の基礎の上に成り立つ思惟方法は、今日にあっても有益な示唆を与えるところ多いと言わねばならない。はじめに述べたように、本稿は、インド経済思想家の原典批判を狙うような思想史的研究を

意図するものではない。ラナーデの現代的意義をできるだけ広範囲の問題領域の中から見いだすことは、後続の論文でとりあげるマハラノビス研究との比較を可能にするであらうし、さらには、ラナーデとマハラノビスを、それぞれの時代に行動原理とした指導的経済思想の影響の跡をたどることは、それが約半世紀の期間であるだけに、実証的にも興味深い課題を持つ。

それは、また、ヌルクセによれば、経済理論と経済史を結合するという、古くして、かつ新しい現代的課題として登場することになるであろう。

(注3) Ragnar Nurkse, *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries*, London, Oxford Basil Blackwell, 1953, p. 104.

(注4) シャルル・ジイド, シャルル・リスト原著, 宮川貞一郎訳, 『経済学説史』, 上巻, 東京堂刊行, 406~410ページ。

(注5) Frederick Clairmonte, "Friedrich List and the Historical Concept of Balanced Growth", *Indian Economic Review*, Vol. IV, No. 3, February 1959, pp. 24~44.

(注6) 板垣与一著, 『国際関係論の基本問題』, 新紀元社刊, 昭和38年, とくに第6章, 「後進国開発の基礎理論」, 305ページ参照。

(注7) D. G. Karve, "Ranade and Economic Planning", *Indian Journal of Economics*, Vol. XXII, No. 86, January 1942, pp. 235~244.

(注8) P. K. Gopalakrishnan, *Development of Economic Ideas in India (1880~1950)*, New Delhi, People's Publishing House, 1959, p. 124.

(注9) Bhabatosh Datta, "The Background of Ranade's Economics", *Indian Journal of Economics*, Vol. XXII, No. 86, January 1942, pp. 261~275.

(注10) P. A. Wadia and G. N. Joshi, *The Wealth of India*, London, Macmillan and Co., Ltd., 1927, 446 p.

G. B. Jathar and K. G. Jathar, *Indian Economics*, Bombay, Oxford University Press, 1957, pp. 1~3.

(注11) Dadabhai Naoroji, *Poverty and Un-British Rule in India*, London, Swan Sonnenschein & Co., Ltd., 1901, p. 675.

(注12) N. V. Sovani, "Ranade's Model of the Indian Economy," *Artha Vijnana, Journal of the Gokhale Institute of Politics and Economics*, Poona, (India), Vol. 42, No. 1, March 1962, pp. 10~19.

(注13) N. V. Sovani, *op. cit.*, p. 12. Edward Thompson and G. T. Garratt, *Rise and Fulfilment*

of *British Rule in India*, London, Macmillan and Co., Ltd., 1934, 690 p.

(注14) Mahalanobis, *op. cit.*, p. 18.

(注15) Bhabatosh Datta, 前掲論文参照。

《付記》 ラナーデ (Mahadev Govind Ránáde) 略伝 (P. K. Gopalakrishnan による)

1842年1月18日 ナーシク (Nasik) で誕生。

1864年 ボンベイ大学にて経済学の講座担当。

1866年 ボンベイ州政府の東洋語翻訳官に任命さる。

1867年 コラプール州判事。

1872年 “Material Conditions in the Maharashtra

District” 報告書提出。

1877年 *Revenue Manual of the British Empire in India* 刊行。

同年 “Famine Administration in the Bombay Presidency”, 報告書提出。

1885年 ボンベイ立法院議員。

1893年 ボンベイ最高裁判所判事。

1898年 『インド経済学論集』刊行。

1890年代 インド国民会議派で活躍。

1901年 死去。

(総務部参事)

THE DEVELOPING ECONOMIES (季刊)

Volume II

December 1964

Number 4

A Proposal for International Aid Kiyoshi Kojima

International Commodity Agreements: Reality and the FutureKenzō Hemmi

The Characteristics of Heavy Applications of

Fertilizers in Japanese AgricultureNobufumi Kayō

Community Development and Public Investment:

Programming for Economic Development in MalaysiaGayl D. Ness

Inflation and its Remedies in India's Planned Economy.....Thomas Mathew

Book Reviews

定 価 ￥ 5 0 0

取扱代理店 丸善株式会社 東京・日本橋